【論 文】

今、60年代フィリピン農村開発に学ぶ
――初期「フィリピン農村再建運動」と*Doctor to the Barrios*

玉 置 泰 明

本稿で中心的に論じるのは、1970年に出版された、Juan M. Flavier （以下「フラビエ」と表記）*Doctor to the Barrios: Experiences with the Philippine Rural Reconstruction Movement* （Manila：New Day Publishers；pp.208） という本である(1)。本書は日本に比べ決して本が売れるとは言えないフィリピンという国にあって、今日まで24刷を重ねているロング・セラーである。本書は1960年代に一民間団体によって農村に派遣された青年医師の村での経験を描いた記録である。フィリピンで広く長く読まれ続けているというものの、「フィリピン研究」にとっての古典というわけではない。本書は研究書として書かれたものではなく、著者が自らの体験をエッセイ風に綴りながら「フィリピン農村再建運動」（Philippine Rural Reconstruction Movement：以下PRRMと略記）の活動を紹介しようとしたものである。続編として、同時期の体験を著者の出会った印象深い村の人物を中心にまとめた*My Friends in the Barrios*（1974）、2冊の好評に応えて未収のエピソードを集めた*Back to the Barrios*（1978）があり、これらを「バリオ三部作」ということができる。さらにその10年後に、日刊新聞 Manila Bulletinに連載したコラムを集めた *Parables of the Barrios* が出版された（すべてNew Day Publishers）。（以下、とくに断らない限り、*Doctor to the Barrios*からの引用は頁数のみを記す。）

なお、本書のタイトルの doctor は文字通りの医師をさすものではなく（それも含んでいるが）、農村の諸問題（病弊）を「治療する」という意味でPRRMの開発ワーカーを著者がそう呼んだものである。

「フィリピン研究」でも「東南アジア農村研究」でも「農村開発論」でも、多くの業績が積み重ねられてきた。では今ごろなぜ1960年代のフィリピンの農村開発の記録を取り上げる価値があるのか。個人的動機も含めて、まず述べてみたい。

筆者は、1983年に文部省派遣留学生としてフィリピン大学大学院に留学してまもなく、この本（1980年第8刷）を見つけて購入した。筆者は1984年からフィリピンの農村で初めての長期現地調査を行なおうとしていたこともあり、その参考として一時代

前の農村の様子を知りたいと言うのが本書を手にとった理由で、購入してすぐにざっと読んだのだが、あまり印象に残らず、その後帰国してからも20数年間本棚でずっと埃をかぶっていた。

再び本書を読み返してみる気になったのは、著者が2008年7月に東京で行なわれた「日比ＮＧＯフォーラム」のゲストとして来日したからである。同フォーラムのメイン・ゲストは当初コラソン・アキノ元大統領の予定であったが、彼女が癌で入院してしまったため、急遽代役として白羽の矢が立ったのが、フラビエ氏だったのである。筆者は仕事の都合で3日間のフォーラムの最終日のみ参加したが、フラビエ氏に会えるというのが参加の大きな動機であった。フラビエ氏は、フィリピンのエリートとしては珍しく庶民・農民の心のわかる政治家として人気を博し、筆者もその人柄のファンの一人であった。過去何度か彼の名が大統領候補として取沙汰されたことがあったが、立候補することはなかった。著者に会って所蔵本にサインしてもらおうというミーハー気分で本書を20数年ぶりに本棚から取り出し、さほど期待しないまま再読してみて驚いた。びっくりするほど面白いのだ。平易な英語で語り口がうまいというエッセイとしての価値ももちろんだが、フィリピンの農民・農村を論じたものとしても、またより広く途上国の農村開発論として読んでも、今日でも多くの示唆を含んでいるのである。筆者は20数年間フィリピン社会を人類学的研究の対象とし、また途上国の開発問題についても執筆したり発言したりしてきたのだが、本書のことを忘れていたことは、迂闊としかいいようがない。

著者本人に感激の対面をした後、上記のフォーラムに参加したＮＧＯ関係者に聞いてみたところ、日本側はおろかフィリピン側の、しかも農村開発を専門とするＮＧＯのワーカーですら、現在この本のことを知らないか知ってはいても読んだことがない人がほとんどであることがわかった。そこで若いフィリピン人ＮＧＯ関係者には、本書がとくに農村で活動をする者には必読書であることを力説し、帰国したらすぐ読むように薦めた。

本書は大変平易な英語で書かれており、安価で入手できるが、やはりこのままでは多くの日本人に読まれることはないだろう。そこで著者に断りもせず、出版してくれる出版社のあてもないまま、筆者は自主的に本書の翻訳を始めた。続編も含めた2冊を一応訳し終わったものの、現時点（2009年6月）でまだ出版の見込みは立っていないが、本稿で本書の内容を論じることで、あらためてその今日的意義を強調し、多くの人に本書を手にとってもらいたいと考えている（訳書が出版される時には、本稿を「訳者解説」の基にするという意図もある）。本書を読んでもらいたいのは、フィリピン研究者ばかりではなく、東南アジア農村研究者、途上国の開発論、あるいは国際協力に関心のある人々である。

Ⅰ．背景

晏陽初（Yen Yangchu、James Yen）と郷村建設運動(2)

PRRMの創設のもととなったのは、中国人の学者・晏陽初（以下「イェン」と表記）である。イェンは1893年四川省生まれ。アメリカの大学を卒業後、YMCAによってフランスに派遣されて中国人労働者の支援活動に従事し、その経験から識字教育の重要性を認識する。1921年に中国帰国後、大規模な識字運動である「中国平民教育運動」と「郷村建設運動」を開始し、中国農民の中に文芸教育、生計教育、衛生教育、公民教育を興し、教育を基礎として文化建設、経済建設、政治建設をはかる運動を推進した（1937年の日本軍侵攻まで）。1943年には、アインシュタインやデューイとともに「コペルニクス逝去400周年記念委員会」から「現代の革命的貢献を成した10人の世界偉人」に選ばれる。大戦後、アメリカ政府による（蒋介石支援の一環であった）「農村再建共同委員会（Joint Commission on Rural Reconstruction：JCRR）」に参加。共産主義政権の成立とともに台湾に移住し、JCRRの活動を継続した。さらに1951年にはＮＹに本部をおく「国際平民教育運動（International Movement for Mass Education）」の創設にも加わる。後半生は第三世界の農村調査や農村指導者の育成、農村開発組織の支援などに尽力した。

中国本国では、統一戦線時代に中国共産党からも「近しい友人」とされたが、中華人民共和国成立後排斥され、文革後再評価されている。1995年には招かれて数十年ぶりに故国中国を訪れて講演をおこなった。1990年ＮＹで死去した（享年97歳）。

イェンの「郷村建設運動」の基本原理は、「民の中へ　その中で生活し　彼らから学び　彼らと共に計画し　彼らが知っていることから始め　彼らがすでに持っているものを基礎として建設する」というモットー（宋 2000:9）に集約されている。

イェンは、貧農の基本的な問題は貧困、非識字、病気、市民的無力感の４つにあるとし、この４つは相互につながっているとして、４つの要素からこれらを改善する統合的なアプローチ（「４要素アプローチ（Fourfold Approach）」）が必要だとした。４つの要素とは、「貧困と闘うための生計向上、無知や迷信と闘うための教育、病気と闘うための保健衛生知識、無力感と闘うための社会組織と自治の技術」である（小野 2004:7）。

この基本的理念と方法論は、そのままPRRMにも引き継がれている。

PRRMと著者フラビエ(3)

イェンは1952年に「国際平民教育運動促進委員会」を代表してアジア諸国、中東などを回り、その一環としてフィリピンを訪問した。その際のマニラ周辺の大学での講演で、若者に都市を離れて農村で働くことを訴え、熱狂的な歓迎を受ける。3000名が

ボランティア志願し、200名が試験プロジェクトで働くことになり、そのうちの24名を中心として、1952年7月にPRRMが発足した。発足時のキリノ政権および次のマグサイサイ政権は、農村部における反政府ゲリラ「フク団」への対抗組織としてPRRMを重視し、最大限の支援を行なう。フラビエも指摘しているように初期PRRMの理事会には政財界の大物が名を連ねている。60年代に入ってPRRMはさらに拡大し、組織としてもしっかりしたものとなった。本部スタッフも、ボランティア集団ではなくすでに専門家集団となっていた。

また、1960年には「国際平民教育運動促進委員会」は、中国とフィリピンの農村建設の経験を広く途上国に普及するためフィリピンに「国際農村再建学院」（International Institute of Rural Reconstruction：以下IIRR）の建設を決定し、1966年にマニラ南方のカビテ州シランに学院の建物が完成する（宋 2000:109）。以後、IIRRでは日本を含む世界中の農村開発関係者が研修を受けている。

PRRMは1965年からのマルコス政権下でも政府との連携を保ちつつ多くの州での活動を順調に拡大したが、戒厳令下で組織の存続のために政府の下請け機関のようになって、従来の支援者からの支持を失い、海外や財界からの援助も途切れて資金難になり、80年代にはほとんど休眠状態に追い込まれた。この点、PRRMを日本に紹介した小冊子の記述は不正確である。「1965年、マルコスが大統領に就任すると、事態は一変した。戒厳令が敷かれ、一切の民間団体の活動が禁止された。PRRMも例外でなく活動停止に追い込まれた」（北沢 1998:15）とあるが、当時のPRRMの活動・理念がマルコスの「新社会」政策と親和性があったことは、フラビエの本書を読むだけでも明らかであるし、戒厳令下でも活動を停止したわけではない。

PRRMは、不活性の時期を経て、マルコス政権崩壊後のアキノ政権下での民主化の流れの中で復活する。フラビエ等がマルコス政権下で投獄されていた左翼活動家のモラレス（Horacio Morales）をPRRMに招き、彼が代表になってから、多くの支持と資金が集まり再活性化した。世界的なNGO興隆期にもあたり、海外の援助団体からも寄付が集まって、活動も盛んになった。エストラーダ政権でモラレスは農地改革庁長官になり、PRRM代表には国会議員のタニャーダ が就任したが、再び資金不足に悩むようになり、2003年には多くの支部を閉鎖するにいたった。現在では、本部、各支部ともにスタッフの規模は縮小し、ボランティアに支えられて、活動は低下しながら存続しているという(4)。

PRRMの農村開発の方法論は、1986年の「再生」以降、「農村開発・民主化プログラム」（Rural Development and Democratization Program：RDDP）を経て、1990年以降「持続可能な地域総合開発プログラム」（Sustainable Rural District Development Program：SRDDP）が中心となった（北沢 1998、小野 2004）。さらに、農村の現場での活動に加えて政策提言もより重視するようになっている。また、PRRMは日本の「草の根援助運動」をはじめとする海外NGOと連携関係にある。

著者のフラビエ は、1935年の生まれ、1960年にフィリピン大学医学部卒業後、医学部で講師をしていたが、誘われてPRRMの活動に参加、その一環としてヌエバ・エシハ州の村々に派遣された経験が本書のもとになっている。

本書以降の著者は、PRRMで働いた後、（農村でさらによく働くために）アメリカのジョン・ホプキンス大学修士課程で公衆衛生学を学んだ。1977年にはPRRMの総裁、1978年〜1992年はIIRRの所長もつとめた。1992年にはラモス大統領によって保健大臣に任命される。1995年からは上院議員を2期（〜2007年）つとめた。その間、「伝統医学法」（the Traditional Medicine Law）、「貧困軽減法」（the Poverty Alleviation Law）、「きれいな空気法」（Clean Air Act）、それに「先住民族権利法」（the Indigenous People's Rights Act）などの法律の制定に中心的役割を果たしている。

フラビエはイェンに感化されてPRRMに参加したというだけでなく、その交流はイェンの晩年にいたるまで続き、1985年にイェンが故国•中国を数十年ぶりに訪問した際にもフラビエがフィリピンから同行している。イェンも、彼が影響を与えた世界の農村リーダーの中でもフラビエに最大限の評価を与えている（1978年の講話。宋2000:260参照）。

Ⅱ．本書の限界と時代的制約

本書に描かれたような1960年代のフィリピンの農村開発から我々が何を学べるかを論じる前に、その限界と、留意すべき点を指摘しておく。それには、イェン博士の思想・実践の本質的な特性に関係する部分と、フィリピン固有の事情に関係する部分がある。

イェン博士の思想・実践について、もちろん中華人民共和国建国後の中国共産党が非難したような「反共、反人民、反革命である」というレッテル（宋 2000：290）は、鵜呑みにはできない。しかし、イェンの思想・実践が「改良主義的」という指摘はその通りである。社会変革に重きをおかない、つまり既存の社会構造を温存する「改良主義的アプローチ」は、だからこそ当時の政権・国家権力とも親和性があったのだが、それが現在では（共産党ならずとも）古いタイプの農村開発と見なされることは否めない。

また、イェンが農民の「潜在能力」を評価しその開花を目指す点はアマルティア・センの「潜在能力アプローチ」の先駆とも見なせるが、教育を受けられず抑圧されている農民の状態を「無知」と決め付けることに対しては、人類学的見方からは多少抵抗を感じざるをえない。イェン等による「識字教育」を受けていない段階でも、彼等

（農民や苦力）は「無知」なのではない。ただ近代的学校教育や識字という基準からの知識をもっていないだけである。例えば伝統的な農業の場面では、「無教育な」農民よりもイェンや我々を含む「知識人」の方が「無知」といえるのではないか。

イェンは共産主義には賛同できなかったものの、「反中国」になったわけではない。在外中に中国政府から「反共」「反革命」的とレッテルをはられて帰国できなくなっても、彼はずっと祖国中国の社会、農民たちのことを考えていた。子供たちには中国に残って国家建設に奉仕するように言っている。ただ、彼等は「反共分子」の子供たちということで「下放」させられるなどの苦労をしたらしい（宋 2000）。

イェンよりも、本書の時代のPRRMの方が、前章で述べたようなフィリピンの時代的背景を反映して、より明確に「反共」を強調しているとも思える。本書の内容自体には反共プロパガンダ色がそう強くはあらわれてはおらず、だからこそイデオロギーと関係なく現在的価値をもっているのだが、本書の最初と最後で読者にPRRMの「反共」の立場を明確に想起させるようになっている。第1章は、著者たちがある僻地農村に「銃を鍬に持ち替えた男」、つまり元共産ゲリラ「フク団」の農民を訪ねる場面から始まる。この男は9年間もフク団の司令官をつとめたが、投降して農民になったのはPRRMの理念に共感したからで、「もしPRRMでなかったら私は今も山で戦っていたはずです。・・・1947年に我々がPRRMを持っていたら、フク団に加わることもなかったでしょう」と発言している（p 3）。最終章は各界で活躍する4人のPRRM評を収録するが、最後に登場するのが香港の難民定住地の提唱者であったGus BorgeestがPRRMを訪問した時の会話である。著者の「共産主義者が香港を支配したら次はたぶん台湾で、次はフィリピンではないか」という質問に、B氏は「それこそPRRMの出番です。だからこそ、その時が来ても共産主義があなた方の自由な国に入り込むすきがないように、あなた達はつねにPRRMを鍛え続ける必要があるのです。自由な心を持ち、飢え、欠乏、無知のない国です」と答えている（p 199）。

現在の目から見て本書に感じるもう一つの違和感は、（反共とも関係するが）マルコス政権に非常に近いということであろう。前述のように、とくに戒厳令下で理念よりも組織存続を重視して政府からの自立性を失ったことは、のちのPRRM自身が反省する点でもある（Dalisay 2002 a）。しかし本書が書かれた当時までは、PRRMおよび著者はマルコス大統領の「新社会」の理念に純粋に賛同し、それが「フィリピン農村再建運動」の理想とも合致すると考えていたのである。後に腐敗するマルコス政権だが、少なくとも初期のマルコスの政策には、農民や都市貧困層の自立のための様々なプロジェクトの立ち上げなどPRRMの理念と共通する部分があったことは、あながち間違いとは言えない。政権及びそれに近い人々が、「新社会」の実現のための手段の一つとして民間団体PRRMを利用したという面もあっただろう。

もう一点、これはPRRMの活動理念自体の時代的制約というべきかも知れないが、農村再建ワーカーたちを科学の伝道師（science missionary：第3章のタイトル）と呼んでいることにも現れているように、当時のPRRMには近代科学、近代技術至上主義的なところがある。とくに第4章の米の増産に関して記述されているように、「国際稲作研究所」（IRRI）で開発された「奇跡の米」（高収量品種）およびその普及とも不可分な肥料・殺虫剤の普及・利用の重要性を全面的に信じているように見える。現金収入プロジェクトでさえも、「奇跡の米」作りに必要な肥料・殺虫剤を買う費用の確保という意味づけがされている（p 100）。当時PRRMは、IRRIとの共同実験も行っている。しかし、その後奇跡の米による「緑の革命」の成果については、肥料・農薬漬け（それによる土地の疲弊）、農民の格差増大などが批判の対象となり、PRRM自体が緑の革命のあり方を批判して、現在ではむしろPRRMは有機農法、伝統的品種の復活（研究開発）などに力を入れているという（北沢 1998）。

PRRMの初期活動について現在あまり顧みられないのは、上述のような現代から見た限界、時代的制約のゆえかも知れない。

Ⅲ．*Doctor to the Barrios* から学ぶ

さて、我々は本書の記述から何を学べるであろうか。大きく言えば、まず古くて新しい農村開発の諸問題であり、さらには、異文化＝他者を見る眼であるといえよう。以下、気づく点を列挙し、筆者の個人的体験や近年の事例との比較なども加えつつ論評してみたい。

日本以上に西洋・都市・近代化指向の強いフィリピンのエリートとして、著者の農村での体験は、同じ国といっても強烈な異文化体験であり、カルチャーショックであった。それは、当時の（現在でも）フィリピンの都市のエリートの生活が村のそれといかにかけ離れていたかを示している。しかし、その体験から謙虚に学ぼうとするところが、本書の著者が他のエリートと異なるところである。著者は、近代科学の申し子でありながら、土着知（ローカルナレッジ）へも暖かい視線を向けている。そのために、本書が人類学的な農村民族誌としても価値のあるものとなっていると言える。

村に「滞在する」ということ

まずPRRMの農村との関わりで現代にも十分訴えかける点は、その時間的なスタンスである。著者は、町から来て村々への短時間訪問を繰り返していた若い殺虫剤セールスマンとの出会いから説き始め、「PRRMでは、農民たちといることに時間をとって彼等のやり方を理解しなければ効果はないことを見出した。彼等のやり方に理由を見出し彼等に歩み寄るとき、変革のための適切なアプローチが明らかになる」（p 46－

47）と指摘する。短時間訪問を繰り返していた（その結果村人に信用されない）セールスマンを諭す著者の言葉は、現代の農村開発論の大御所ロバート・チェンバースが「農村開発ツアー」と呼んだ短時間訪問のバイアスへの批判（チェンバース 1995：35-36）を先取りするものである。しかし、チェンバースの批判以降でも「農村開発ツアー」は世界中に蔓延している。

また、「彼等が来るときには、滞在してくれる」という村人のPRRMへの評価は（p41)、単に時間の長さだけではなく村（村人の家）に「泊まる」ことの重要性を示している。役人でもNGOの人間でも、何十回村にやって来ても決して村に泊まらない者は、真の仲間とは見なされにくいのである。

筆者の調査村（ルソン島南部の先住民の村）で2000〜2002年にかけて3回にわたって日本のNGOによるワークキャンプが行なわれたことがある。NGO訪問団が最初に村にやってきたのは1999年の夏で、村での滞在時間30分弱で翌年のワークキャンプの合意をとりつけて去っていった。翌夏の1週間余りにわたるワークキャンプでは日本人と村人が道の整備その他で共に汗を流し、共に食事をし、夜も交流して大きな成果を挙げ、今でも村人たちはこの時のことをすばらしい思い出として語っている。しかしその後2回のワークキャンプについては、人々はほとんど語らない。初年度のキャンプで何人もの日本人が病気になった経験からNGO側が方針を変え、2、3回目は、行なわれた作業の質量に大差はなかったが、村に泊まらずに町の宿舎に泊まって日中だけ村に来て作業をやり、しかも昼食は自分たちのものを持参した。その結果、初回のよい思い出が持続しているにもかかわらず、2、3回目のやり方によって、日本人もやはり用事のときだけ短時間やってくる町の役人と変わりないという印象を与えてしまったのである。

村での居住と調査での注意点

著者が列挙している村に住み込む若いワーカー（RRW）への具体的な留意事項は現代のワーカーあるいは研究者、学生にも十分通用するものである。

ワーカーが住む下宿の選定は非常に重要であり、一般的指摘として、ホストの家が村の中心に近く家主が尊敬される家族であるべきこと、家族がゲスト（ワーカー）を負担と感じるようにならないため支払いに関してきちんとした取り決めが必要であること、下宿先を移るときには非常に気配りが必要であること、などを挙げている（p69－71）。

ただ、現在のPRRMは「村に常駐する場合は最も貧しい住民の家に寝泊りしている」（北沢 1998：18）といい、下宿先に関するポリシーを転換したらしい。これは、どちらがいいとは一概に言えない難しい問題である。支払いに関しても、下宿代の支払いが他の家からの嫉妬の原因となる可能性もあり、微妙な問題を含む。

とくにワーカーが女性の場合、結婚話の攻勢からどう身を守るかのアイデアがいく

つか挙げられているが（p 70）、男女を問わず町あるいは先進国から来た独身者が村で結婚対象と見られることはかなり広く見られることである。筆者も80年代半ばに始めてフィリピン農村に長期で住み込んだとき、数え切れないぐらい結婚話をもちかけられて弱ったものである。また、嫁不足に悩む現代日本の農村では、社会調査や民俗調査に来た女子大学生はしばしば嫁候補として見られる。10年ほど前に静岡県立大学の社会調査実習授業で行った離島で、女子学生が地元の人に気に入られ、彼女が後日個人的に遊びに行った時に、本人の知らないうちに地元青年との見合いが設定されていたことがある。

洗礼のスポンサー（代父、代母）の依頼をどう断るか（p 76－77）というのも、フィリピンでは無視できない問題である。より一般的には、借金の申し込みがより切実な問題といえる。筆者も経験したことであり、かつてフィリピンのスラムに長期的に通ってドキュメンタリー映画を撮影した日本の監督も、借金依頼への対応が最大の問題だと語っていた。

ワーカーの仕事上の心得として、警戒するので農民の前でノートをとることに慎重であるべきという指摘（p 68）は、現代の研究者・学生にとっても（現代なら録音ということも含めて）心すべきことである。

農民と農村社会を理解するために、手間がかかってもサンプリングではなく、各戸調査が必要であると言う指摘（p 67）は、抽象的数字を相手にするのではなく顔の見える個々の農民の個性を大事にするというPRRM のポリシーの根幹に関わるものである。このことは、人類学にとっては当たり前すぎることかもしれないが、農村開発においては前述の長期滞在と並んでなかなか実現が困難なことである。PRRM自体でも、人員・活動の縮小した現在では実施されているかどうか疑問であり、それだけにいっそう初期PRRMの再評価すべき点といえるだろう。

一方、村に住んだよそ者が噂あるいは伝説の対象となること（p 19－20)、その怖さが語られているが、これも人類学者、フィールドワーカーが多かれ少なかれ体験することであるといえる。村落社会における噂の社会的機能については、人類学や社会学による様々な研究があるが、フィリピンの庶民はとりわけゴシップ好きとも言える。続編で、貸し倒れで赤字続きのサリサリ・ストアの女主人に著者がなぜ閉店しないのが問うと、店を閉めると娯楽がなくなり彼女の生きがいである噂の流れが切れてしまうと答えている（Flavier 1974: 179-180）(5)。筆者も80年代の農村滞在中に十分体験したことであるが、噂にはそれが善意によるものであれ悪意によるものであれ、直接噂の対象となる人々だけでなく関係者や地域社会にとって破壊的な影響を及ぼす場合があり、とりわけよそ者にとっては対処に細心の注意が必要なものである。

土着知（ローカル・ナレッジ）、文化・社会的価値への視点

著者は、学校教育をほとんど受けていない農民たちの固有の知識への素直な驚き、共感を表明している。

村の年長者が時計を持たずに花や葉の開き方から時刻を言い当てたり、水の入った瓶の外側についた水滴から雨の降る方角を言い当てたりするのに素直に驚き感心した後（p 28－29)、「農民の生活について洞察したいなら、農民のやり方を理解しようと努力することが重要だ。開発関係者（change agent）にとっての大きな落とし穴の一つは、彼の生活様式や基準、先入観を人々に押し付けようとする傾向である」と指摘する（p 32)。これは当たり前のようだが、21世紀に入っても重要性を失っていない指摘である。

著者は土着知に感心するだけではなく、自らその実践者になってしまう。子供が高熱を出して困ったときに村の老婆が持参した、刻んで水を降りかけたバナナの幹の見事な冷湿布効果に驚き、のちに自分も大いに利用するようになったという（p 144)。この方法は、コストがかからない点も含めて現在でも十分有効なはずだが、残念ながらほとんど使われていない。筆者は本書で知って、もう一回普及させる価値があると感じている。

PRRMは、家内工業の分野でより積極的に土着知を活用し生計向上に役立てている（第7章)。PRRMの農村家内工業の基本原則は、原材料が村で入手可能なこと、必要な基本的技能が人々に保有されていることである（p 126－127)。例えば、竹細工プロジェクトでは伝統的に使われていた道具（漁具など）が商品化された。「伝統的」ではないが、空の鶏用飼料袋を利用した男女用多目的衣料は、まさに（レヴィ＝ストロースの言う）ブリコラージュ（器用仕事）に他ならない。また、かつてはどんな家でもやっていたが軽視されていた伝統的な食料保存技術（乾燥、燻製、塩漬け、瓶詰め他）の活用は、現在日本各地（とくに過疎化地域）の女性たちによる地域起こし事業の中で中心的商品となっているものと重なることに気づかされる。

信用組合の組織化（第6章）においては、「農民個人へのアピールだけでは不十分」として、フィリピン人の集団的文化的価値が利用される。村のリーダー達をすでに組合が機能している他の村に連れて行くことで、"gaya-gaya"（人のやることをやる）というフィリピン人の悪い性癖をプラスに利用し、さらに「成功しなければ恥をかく」ということでフィリピン人の行動理念の鍵の一つとされる「恥」(hiya）を利用するという方法は（それがどのていどうまく行ったかは明確でないが)、まさにかつて人類学者フォスターが描いたような農村開発の古典的手法の一つ（農村社会の中にすでに存在する変化•革新の促進要因を利用する）であるといえよう（Foster 1962)。

もちろん、固有の文化的価値・行動様式は発展の阻害要因になることも指摘される。客人に最上のものを提供するというホスピタリティによって、プロジェクトで供与さ

れた舶来種の鶏を客人にあげてしまう例が挙げられている。

上記の信用組合の組織化および活動において強調される人々の個人的関係、例えば融資決定にあたってメンバーの個性を考慮する「人格による融資」（character-lending）は、現代的概念で言えば、「社会関係資本」（social capital）の重視ということになるだろう。

農民を美化しないこと

著者の農民および農村社会への深い共感・理解が価値をもつ理由の一つは、彼がそれを「美化」していないことである。第２章で彼の農民への理解の基本的スタンスが述べられる。「農民とは何だろう？私にとって農民は、もう一人の人間にすぎない。恐れも希望ももてば、徳も悪徳ももつ、憎しみも心もある人間だ。彼は村という状況でこれらを組み合わせたものにすぎない。彼は、固有の環境で、固有の状況とニーズに反応する、他の人間とかわるところはない。基本的なことは、彼をあるがままに理解することであって、我々と同じように理解することではない」（p 17）。

「村の人に会ってみよう。彼が忘れられた存在だと感じ続けるのなら、彼にとって民主主義なんてほとんど意味がないものだ。彼は多くを求めやしない。彼と家族のためのもう少しの食べ物と、もう少し大きな屋根、もう少々の衣服だけだ。土に生まれた彼は、慈善を求めてはいない。単に存在する（exist）だけではなく生きる（live）機会を求めているだけだ。彼は、認知、個人の尊厳、同胞の中での正しい居場所を求めているのだ。彼こそが、フィリピン農村再建運動のターゲットだ」（ibid.）。

著者のプロジェクト地Ｎ村への初訪問は、いきなり馬車の御者に運賃をぼられる経験から始まっているが、御者とは後に非常に親しくなるし（p 16－17）、子供の病気を治したことから仕方なく恐る恐る付き合うことになった脱獄囚からは鶏をもらって食べ、後でそれが盗んだものだとわかって（気のせいか）腹が痛くなるという経験を、ユーモアをもって語る（p 23－24）。信頼してタマネギ作りのパートナーとなって費用を投資した農民からは影で裏切られていたことを知って愕然とする（ibid.）。また、著者の留守中にPRRM本部から有刺鉄線が盗まれた事件（後に返却された）では、著者の留守中に盗むことで彼の顔をつぶさないように配慮したのだという農民達の説明に対し、「共感はできないものの、理解する」のである（p 24－26）。

こうした経験はどれ一つをとっても村や農民を嫌いになったり偏見・先入観を強化することにつながってしまいかねないものである。現在でもそうした経験から特定の地域や人々に不信感•拒絶感をもってしまう先進国の人間は少なくない。NGOなどの草の根レベルでの交流を行なっている人ですらそうである。著者のような態度は、なかなか頭で考えて身につくものではなく、著者が基本的に「人類学者」的なスタンスをもっていることの表れではないだろうか。いずれにしても、著者の経験とそれへの感じ方は、現代の我々にも大きな示唆を与えてくれる。

保健・医療プロジェクトの医療人類学的含意

著者は医師であるだけに、本書（および続編、続々編）の中でも多くの部分が医療・保健・衛生関連の記述に割かれているのは当然ともいえる。本書の3つの章（8～10章）はとくにこのテーマを扱っているが、それ以外の章でも随時医師としての経験が参照されている。そこで以下では医療・保健にかかわるいくつかのポイントをまとめて論じる。

第8章で述べられるように、当時PRRMはフィリピン政府の農村健康部隊（Rural Health Unit）プログラムと連携し、村のヘルス・センターを基地としてとくに補助的ヘルスワーカーを養成した（p 134）。薬の管理・配分はその大きな役割だが、著者は時々来る訪問医療チーム（政府、民間）による薬（主に期限切れの近い試供品）の寄付の問題点を指摘する（p 135－137）。寄付された薬はしばしば村のリーダー層によって独占されて内輪へのばらまき、無駄使いに至る。PRRMはそれを防ぐために補助ヘルスワーカーによる薬品の管理、原価による販売の方式に変えたが、この薬のばらまき的寄付とそれに伴う問題点は、現在でもフィリピンで（おそらく他の途上国でも）しばしば見られるものである。

筆者が調査しているケソン州の先住民の村でも時々官民の無料医療チームがやってくるが、数年前筆者の滞在中にNGOの訪問医療チームが残していった大量の薬品の中にはかなりの割合で期限切れのものが含まれていた（そのすべてが直ちに使用不能というわけではないが）。また1990年ごろ、やはりフィリピン山中で出会ったある村人は寄付された薬を目に付けてそのせいで目をはらしていたが、筆者がその薬を見ると日本製の傷薬なのであった。このようにただ薬を寄付すればいいというような「援助」は後を絶たない。

また人類学者、あるいはただの旅行者であっても、手持ちの薬（とくに抗生物質）を分け与えることによる危険は常に存在する。命の恩人になるか、人殺しになるかは紙一重なのである。

また、著者は近代医学、町の病院を絶対視して病人を無理やり町へ搬送することの問題点を指摘する（p 139）。凸凹道を馬車に乗せて病人を運ぶことでかえって病気が悪化することもある（病人を揺れないようにする馬車の改良も興味深い）。簡単な知識による適切な判断があれば、家庭療法で十分なことも多い。前述の、バナナの幹による熱さましはその一例である。山村で新生児破傷風による死亡率を下げるプロジェクトでは、著者は破傷風の原因がへその緒を切るのにブホと呼ばれる小さな竹を使うのが原因であることを知った。そこでブホを捨てるキャンペーンを行なったが、半年たっても村では依然としてブホが使われていた。村人に理由を聞くと、ハサミのような「自然でないもの」を使うと子供が家族に忠実でなくなると信じていることがわかっ

た。そこで著者は考えをかえ、ブホ使用をやめさせる代わりに使う前にブホを火で焼いて消毒することを提案し、破傷風感染率の低下に成功した（p 44－45）。この伝統的慣習と近代的医療・衛生観念を結合する手法は、現在の国際医療協力（しばしば医療人類学者が関与）ではしばしば行なわれるものであるが、著者の試みは先駆的なものの一つだろう。

清潔な飲料水のための掘りぬき井戸プロジェクトでも同様の対応が見られた（p 51－54）。従来型の浅いポンプでは濁り水が混入して胃腸病の原因となっていたので、飲料に適した深い掘りぬき井戸が掘られた。しかし数ヵ月後、村では依然として浅いポンプの水が台所用に使われ、せっかくの掘り抜き井戸は洗濯用に使われていた。著者がある女性に理由を尋ねると、すぐに必要だがあまり多くの水を必要としない料理用には水量の少ない庭の浅いポンプを使うこと、また庭のポンプで洗濯すると庭がぬかるむので嫌なこと、洗濯は少し遠くても時間のある時に行って皆とおしゃべりしながらやる方がポンプで一人ぼっちでやるよりも楽しいこと、などがわかった。これは村の女性の大半の声を代表しており、PRRMは浅いポンプを改良して飲用に適するように水質を向上させるという対応をとったのである。この女性の意見のうち最後の「社交としての洗濯場」（井戸でも川でも）という点は、人類学者は古くから注目し調査の対象にもしてきたことだが、近年になって民間援助でも考慮されるようになった。こういう（技術だけでは解決できない）社会的側面への配慮という点でも、PRRMの対応は先駆的なものと評価できるだろう。

村人の意見・ニーズを最大限に取り入れることは、衛生的トイレの導入をめぐる試行錯誤（第 9 章）に最もよく現れている。農村への（衛生的）トイレ導入の試みの歴史は非常に長く、アメリカ植民地期の20世紀初頭にすでに「穴トイレ」の導入が始まっている。独立後も繰り返し官民のトイレ導入プロジェクトが行なわれ、トイレのタイプにも様々な改良の試みがなされたが、大きな成果を挙げなかった。従来のトイレは農民にとって費用、悪臭、見栄えの悪さ、危険（穴トイレだと子供が落ちる）などの点で不評だった。PRRMは、農民達の多様な声・ニーズをくみ上げて 5 年間の試行錯誤の後、安価で衛生的で長持ちする手で流す方式のトイレを開発し、同時にトイレの必要性を説き使用を促すキャンペーンを行なって、PRRMの入った村ではこの型のトイレが非常に普及した。

このトイレをめぐる長い試行錯誤は現在にも示唆するところが多いが、こうした努力の結果として現在は農村部にもトイレ使用が浸透したかというと、残念ながらそうも言い切れない。（フィリピンに限らず）途上国の農村でのトイレ設置はNGOのプロジェクトなどもあってかなり拡大したものの、使われないトイレがまだまだ多い。本書ではせっかく作ったトイレに施錠して大事な客にだけ使わせて（見せて）いた事例を紹介しているが（p 152－153）、近年でも施錠されたままのトイレはフィリピンの

農村でしばしば見かける。壊れたまま放置されているものも珍しくない。トイレを作ったという実績だけでフォローのないプロジェクトの結果である（同様のことは井戸などでも起こる）。農村部でもテレビはもちろん携帯電話まで使っていてもトイレは使わないという状態の変革は、40〜50年も前にPRRMが行なったような人々の意識レベルへの粘り強いアプローチが必要なのである。

トイレ使用よりもさらに困難なのは、家族計画をめぐる問題である。著者は本書の第10章で家族計画を扱い、続編でも家族計画での苦労話を縷々述べているように、それは彼およびPRRMにとって最重要課題の一つと考えられる。PRRMはまずリズム法（安全日と危険日を教える）を導入し、さらに経口避妊薬の普及を試みたが、様々な障害に出会う。産児制限の必要性および妊娠・出産の科学を理解させるために、農民が理解しやすいような身近なものによるわかりやすい説明（たとえば農業に関わる類比）の試みは、現在の我々にとっても大いに学ぶべきものである。

しかし家族計画に関しては、農村開発事業の他のどの側面にもまして、個々の農民、農村レベルでの努力には限界があることは著者も認めており、政府の介入の必要性を示唆している（p 168）。ただ、政府が権力をもって人口問題に介入すること（極端な例が中国の一人っ子政策）の問題性に加えて、フィリピンでは介入自体への固有の抵抗勢力が存在する。それは、本書には全く触れられていないが（それは意図的に避けたのか、あるいはあくまでも村レベルでの話だから触れていないのかわからないが）、カトリックの保守派の抵抗である。著者は、その後フィリピン史上初のプロテスタントの大統領であるラモス政権下で保健大臣になったが、彼自身が国家の家族計画の権力を握ったときにカトリック教会の強い抵抗にあったことは、記憶に新しい。フィリピンの人口増加率はその後も低下するどころか、現在では世界有数の増加率になっている。1980年代に日本の約半分だった人口は、近い将来に日本を抜くと予想されているのである。

Ⅳ．おわりに

前述のように、初期PRRMの開発手法自体は、たしかに今となっては「古い農村開発」として批判され乗り越えられるべきものであるかもしれない。しかし、著者フラビエや若きワーカーたちの住民との「ラポール」の築き方、そして現地の文化への深い共感と理解は、現在の農村開発ないし開発援助に多くの示唆を与えてくれる。それは、1990年代以降、長らく「過去のもの」として忘れ去られた戦後日本の「農村生活改善運動」が再び注目されて、様々に研究され再評価されている事実とも通じる面があると言えよう。

さらに付け加えると、筆者を含む日本人の多くは、本書に描かれたPRRMの若い

ワーカーたちのボランティア精神に共感を覚えるだろう。阪神大震災の1995年がやっと「ボランティア元年」と呼ばれた日本から見ると、日本では考えられないくらい農民との格差が大きいフィリピンの都会の大学出のエリートである多くの若者たちがこの時代にすでに熱意をもって農村のボランティアに出向いていたことに驚きと羨望の念すら覚えるかもしれない。しかし、PRRMのリーダーたちは最近の若者に当時と同等のボランティア精神を求めることが難しくなったといい、フラビエ自身が、1993年にフィリピン大学医学部の新卒業生144人に向かって農村へのボランティアを４人募ったところ「誰一人として応えてくれなかった」と言って嘆いている（Dalisay 2002ｂ：81）のは皮肉としかいいようがない。

最後にもう一つの読み方として、本書に描かれた（農村開発の活動ではなく）農村社会のあり方、農民の生き方自体を、我々自身が学び、変わるための契機としてとらえることを指摘したい。本書に描かれたフィリピン農村の姿は、フィリピンの国民的漫画家ラリー・アルカラの『アンボおじさん』（Mang Ambo）(6) の描く世界と大きく重なる。そこには、貧しいが様々な喜怒哀楽に満ちた、「充実した」生があった。1980年代半ばにフィリピン農村に住んだ筆者の経験では、機械化の進行や都市や海外への出稼ぎ者の続出から農村コミュニティの紐帯の脆弱化が感じられたが、それでもまだ本書に描かれたような農村の暮らしや人間関係の機微は十分に感じることができた。

現在の日本の農村・農業の閉塞状況をみるとき、途上国の農村と比べてどちらが「援助」されるべき対象なのかという疑念がうかばざるを得ない。途上国の農村は、日本の「援助」の対象であるよりも対等な対話の対象であるべきではないか。

農村だけの問題ではない。日本で、雇用から医療、教育、生活を含む社会全体が崩壊の危機に瀕しているように見えるのは、我々が農村を見捨ててきたこととも無関係ではないだろう。都市と農村の分断を乗り越え、都市が農村のあり方から学ぶことも今必要とされている（懐かしい未来ネットワーク2009）。

「過去」も対話の対象と考えれば、本書に描かれた農村世界との対話からも我々は学べるに違いない。

謝辞

本稿の作成にあたり、PRRMの歴史について修士論文の引用を承諾してくださり、PRRMの資料を提供してくださった上に、PRRMの現状についてもご教示いただいた、「草の根援助運動」の小野行雄氏に感謝申し上げる。

注

(1)　"barrio" はスペイン語に由来する当時のフィリピンの最小行政単位の名称であり、後にマルコス大統領がマレー語由来の "barangay" にかえて現在に至っているが、現在でも都市部に対比する意味での農村をさす場合に barrio はしばしば使われる。本稿では、barrio を「村」ないし「農村」と訳す。

(2)　本節の記述は、宋 2000、Dalisay 2002 a、2002 b、小野 2004 による。

(3)　本節の記述は、Flavier 1970、Dalisay 2002 a、2002 b、小野 2004による。

(4)　PRRMの現状については、小野行雄氏の個人的ご教示による。

(5)　sari-sariは「いろいろ」「雑多」を意味するフィリピン語で、サリサリ・ストアは日本の「よろずや」に相当し、大都市から離島・山間僻地までフィリピン全土に無数存在する。単に品物の売買だけでなく、地域の人々がたむろして酒を飲んだり情報（噂話）を交換したりする場となっていることが多い。

(6)　舞台が都市と農村という差はあるが、同じく新聞の連載4コマ漫画で庶民の暮らしと感情を描いている点で日本の「サザエさん」に近い。

引用・参考文献

Juan M. Flavier, 1970 *Doctor to the Barrios: Experiences with the Philippine Rural Reconstruction Movement,* Manila: New Day Publishers.

---------- 1974 *My Friends in the Barrios,* Manila: New Day Publishers.

---------- 1978 *Back to the Barrios,* Manila: New Day Publishers.

---------- 1988 *Parables of the Barrios,* Manila: New Day Publishers.

Dalisay, J.Y.,Jr. 2002 a "Not Relief But Release: The Early Years of the Philippine Rural Reconstruction Movement", *Community & Habitat* （Journal of the Philippine Rural Reconstruction Movement） No.10.

---------- 2002 b "Development in the Hands of People: PRRM: The Years of Transition and Revival", *Community & Habitat* No.11.

Foster, G.M. 1962 *Traditional culture and the impact of technological change,* NY: Harper & Bro. Publications.

チェンバース、R　1995 『第三世界の農村開発：貧困の解決――私たちにできること』　明石書店

宋恩栄 2000『晏陽初――その平民教育と郷村建設』農山漁村文化協会

北沢洋子1998『開発は人びとの手で　ＮＧＯの挑戦：フィリピン農村再建運動』現代企画室（ブックレット）

小野行雄　2004「フィリピン農村再建運動モデルの批判的検証に基づく草の根圏域開発モデルの構築」日本福祉大学国際社会開発研究科2003年度提出修士論文

懐かしい未来ネットワーク編 2009『都市が<村の暮らし>に学ぶ時代――世界経済危

機と「ローカリゼーション」への転換』（『農村文化運動』192号）、農文協
草の根援助運動ＨＰ　http://www.p２aid.com/prrmhistory.htm　（2009年５月10日取得）
PRRM・ＨＰ　http://www.prrm.org/　（2009年５月10日取得）